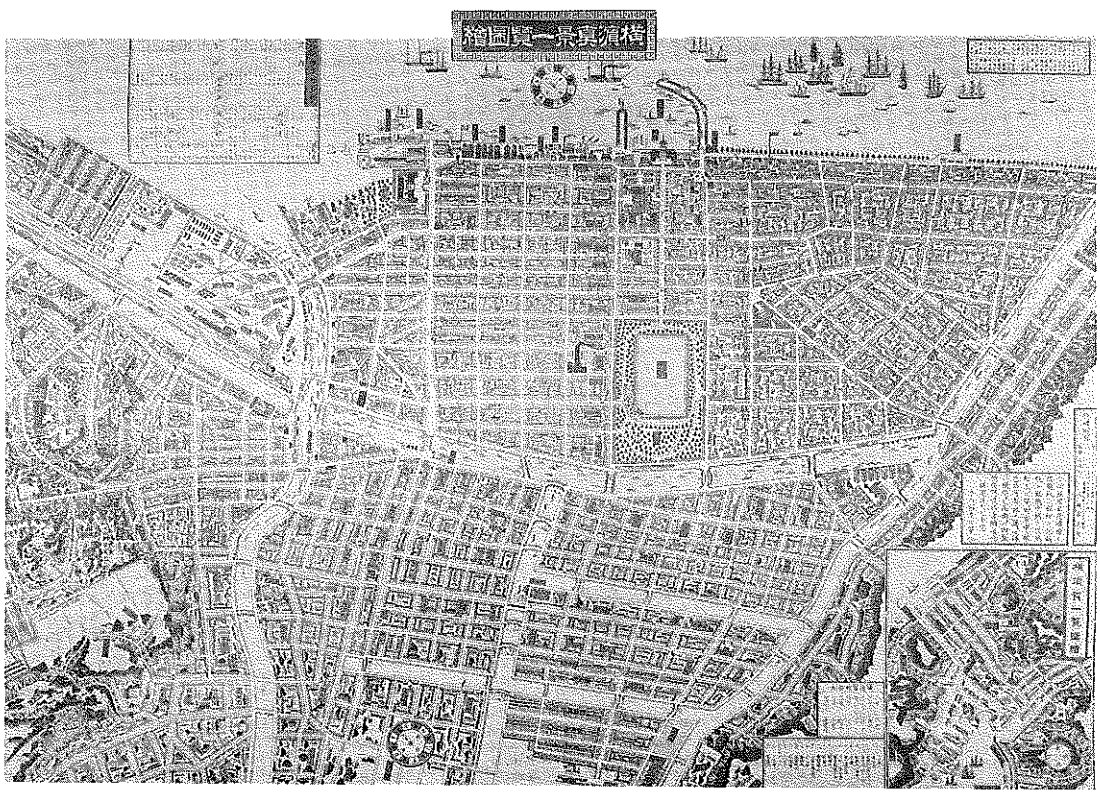
資料

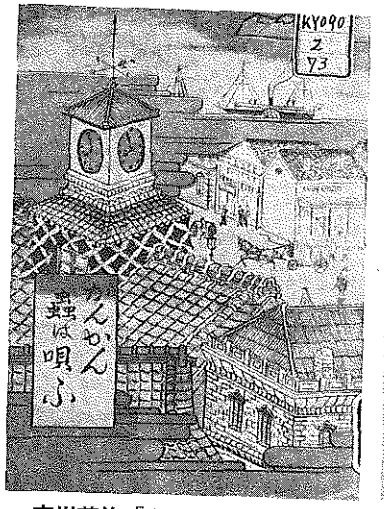
中 区 文 学 散 歩

― 関内を中心として ―

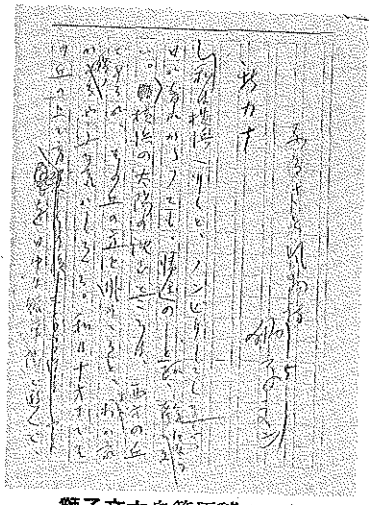


横浜市中区役所市民課

目　次



吉川英治「かんかん虫は唄う」の表紙



獅子文六自筆原稿の一部

1　吉川英治……2頁
2　長谷川伸……2
3　北林透馬・余志子……3
4　下岡蓮杖……3
5　丸善商社……4
6　獅子文六……5
7　伊藤痴遊……5
8　今井卯木……6
9　海港文学の会……6
10　横浜正金銀行と烏水・幸吉……6
11　岡倉天心……8
12　横浜毎日新聞……8
13　仮名垣魯文……9
14　岸田吟香……10
15　有島三兄弟……10
16　横浜港郵便局と詩人たち……11
17　秋元不死男……12
18　ゲーテー座……13
19　ヘボン……13
20　大仏次郎……14

参考資料

◇文学神奈川地図(S44年)市図書館
◇資料で見る横浜(S46年)　〃
◇ヨコハマ散歩(S48年)森篤男
◇ヨコハマ文学散歩(S49年)市図書館
◇横浜もののはじめ(S49年)　〃

資料

「中区文学散歩」

―関内を中心として―

言うまでもなく、かつて当市は日本という国を世界のなかに引き出させた歴史的な役割を果した処であり、そのなかでも当区は近代文明の源流の地として日本の新らしい夜明けを謳った地域でもある。そして開港に伴って諸方より馳せ参じた民衆による民衆の町でもある。

長谷川伸、吉川英治、獅子文六、大仏次郎等大衆文壇の代表的巨峰たちが輩出されわが国近代文学の歴史に特異な色彩を放ったのも偶然ではない。

横浜という都市にこの百年間、大きな変化をもたらしたものが二つある。

関東大震災がその一つであり、第二は太平洋戦争の空襲による灰燼とその後に続く米軍の接収である。

文化とは与えられるものではなく市民自らが汗で作り上げてゆく手づくりで土の臭いのするものであり、そのためは市民自身に文化を作りあげようという意識の高まりがのぞまれよう。

今日、横浜の文化が問い直されようとしている時、激しい都市化のなか、断絶ということばが叫ばれている現在、先人の光と影の足跡をたづねるのは単なる過去への憧景と郷愁(ノスタルジア)ではなく現在と将来に向ってそれがしっかりと結びつけられなくてはなるまい。

次に紹介する歴史的文学群像は横浜にとっては全体の氷山の一角にすぎない。まだ多くのことが埋没しているが、紙面の関係から割愛し、次の機会をまってご紹介することにしたい。

◪ 吉　川　英　治　（作家）（尾上町）

本名　英次。明治２５年８月１１日中区山元町で生れた。１７才の項、尾上町もと川村印章店（現朝日新聞社横浜支局裏付近）への住み込み奉公で実社会へスタートし、苦難の末、作家生活に入る。昭和３５年文化勲章受章。

昭和３７年９月７日没。７０才。

＜宮本武蔵＞＜新・平家物語＞等の著作があり、横浜を舞台とした作品は＜かんかん虫は唄う＞でほか案外と寡ない。

＜短かかったが、私にとっても尾上町時代の一年余は横浜文化の特異な面もちょっと嗅ぎえたし書物にも親しめ絵遊びも出来、感謝していい期間であった。――不思議に思うのは昔の横浜のような物質文明がさかんだったところで、たくさんの文人画人が生れていることだ。少年時代の記憶でも文芸がさかんで眼から私の生活に感染していたらしい。＞（吉川英治　忘れ残りの記）

＜「食えない者は誰れでも俺に尾いてきな、晩にや、十銭銀貨（わんだら）二つ、白銅一個を進上するぜ」かんかん虫のトム公は領土の人民を見廻るように、ときどき自分の住んでいるイロハ長屋の飢餓をさがした。＞

（かんかん虫は唄うの冒頭の一節）

文中至るところに明治中期の横浜の情景がいきいきと描かれ遠くなった明治への郷愁をかりたてる。

◪ 長谷川　伸　（作家）

本名　伸二郎。明治１７年３月１５日中区黄金町で生れた。

家業は土木請負業。４才のとき実母に生きわかれる。この幼年体験が後年代表作＜瞼の母＞を生む。家は破産、小学２年で中退、一家離散、１２才で土木現場に働きつぶさに人生の辛酸をなめる。都新聞記者を経てやがて文筆生活に入る。＜一本刀土俵入り＞＜沓掛時次郎＞など仁侠の名作を書き文壇に独特の地位を占めるようになった。第４回菊地寛賞、朝日文化賞受賞。昭和３８年６月１１日没。７８才。

考証物に＜よこはま白話＞がある。英治と同様共に横浜船渠（ドック）で働いている。

◪ 北　林　透　馬　（作家）（相生町）

本名　清水金作。明治３７年１２月１０日、馬車道の清水平安堂薬局に生れた。横浜一中在学中のちの〝海港〟の詩人熊田精華が上級にいてその影響で詩を書いた。昭和５年中央公論に＜街の国際娘＞が入選して一躍文壇に登場、以来、国際色豊かなモダンな作風が〝ヨコハマ的な〟と言われている。清水孝祐のペンネームで詩も発表している。昭和４３年１１月１３日没。６３才。

夫人の北林余志子は弁天通り４丁目に生まれ紅蘭女学校（現、雙葉）を出、岡本綺堂門下の劇作家として健在。

＜開港女気質＞代表作＜牛を食う＞は昭和９年前進座が上演した。

◪ 下　岡　蓮　杖　（写真師）（太田町）

文政６年２月１２日伊豆下田に生れた。

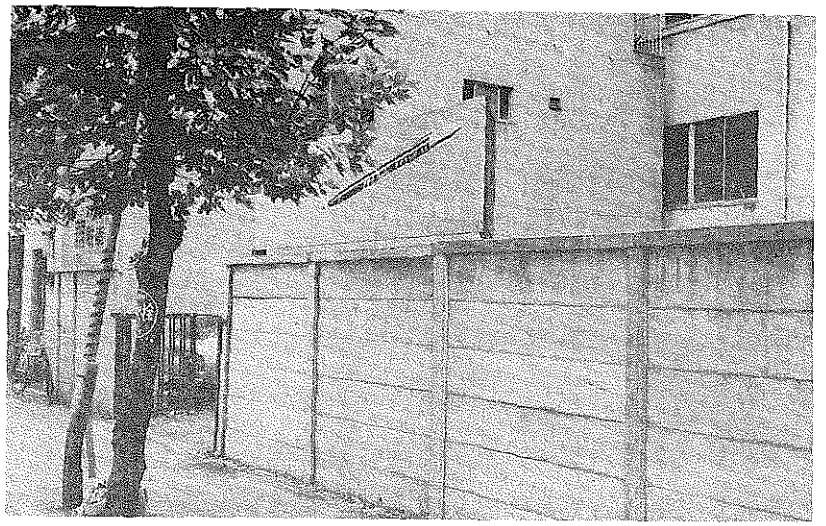
文久２年７月弁天通２丁目で写真撮影をはじめわが国営業写真師の鼻祖とされている。

その頃、「写真をとると命が縮まる」という迷信のため写真をとりにくるものが少なく営業に苦労したという。明治初年馬車道に写真館と書店を開き、門弟に横山松三郎、鈴木真一、江崎礼二、内田九一などがいていづれもわが国写真師の草分けとして活躍した。

蓮杖は明治５年７日２１日の夜、横浜港内で起った米国船の火災を波止場から撮影して成功したというが、これはわが国で最初の夜間撮影という。そのほか、明治２年乗合馬車会社成駒屋を吉田橋際に開業したり牛乳屋をはじめるなど文明開化期の新事業で活躍。明治９年浅草へ移り大正３年３月３日没。９２才。

◇ 丸善商社

（弁天通り）



有的の店舗跡地（現 神奈川新聞社裏）現在「丸善」の標識が立てられ、駐車場となっている。

創業以来、西欧文物の輸入を事業の主体としてわが国文化の向上に貢献した。とくにわが国最初の洋書輸入を行った。

初代経営者は早矢仕有的（はやしゆうてき）。明治2年尾上町で開業、間もなく相生町２丁目に移って書店と薬店を経営しその後弁天通りに移り本店は東京と変ったが昭和２０年５月の大空襲で焼けるまで横浜支店として有的の店舗跡地２丁目３４番地で営業していた。

弁天通りに生れた北林余志子は言っている。

＜私の子供の頃、この弁天通りの人通りは日本人より外人の方が多かった。その頃、自動車ではなく馬車が走っていた。とくに二人乗の人力車のうしろには水滸伝の魯智深とか滝夜叉の極彩色の錦絵がかかれてあり、その絵を見たさに遠くまで追って行った陽炎のような追憶がある。丸善へ入ると洋書の臭いがたちこめていた。アンデルセン童話集を買った覚えがある。

また、丸善の早矢仕社長は毎日お昼にグランドホテルに行ったが、毎日御飯の上になにかかけたものが好きだったのでホテルでは早矢仕社長の昼飯からハヤシライスという名前が生れたという噂がある。

丸善を始め横浜に本拠をもった老舗が、震災後、戦災後と次々に東京へ移っていってしまったのは横浜人として非常に淋しい。＞

◇ 獅子文六　（作家）（弁天通り）

明治２６年７月１日中区弁天通り１丁目１９番地に生れた。

慶応義塾大学卒業後渡仏、パリで演劇を研究して帰国後、演出や劇作で活躍したが、昭和９年獅子文六の筆名で作品を発表ユーモア小説に新生面をひらき、以後諷刺に富んだ明朗で健康な家庭小説を書いて人気作家となった。

戦後も＜てんやわんや＞＜自由学校＞等新聞小説を発表、なかでも戦後の横浜を舞台に描いた＜やっさもっさ＞は興味深い。

演劇関係の仕事も岩田豊雄の本名で発表、久保田万太郎、岸田国士らと文学座設立に参画した。昭和４４年文化勲章受賞。同年１２月１３日没。７６才。

＜福沢諭吉に学びその影響で横浜の貿易商を営んだ父親のことを文六は「父の乳」の中で心から懐かし気に書いている。

明治２０年代から３０年にかけての横浜が幼き日の文六さんの眼を通じて実に鮮やかに活字されている。東京ではとても食べられなかったようなシュークリームやエクリアというようなケーキを食べ洋食、中華料理にもすでに接し海水浴に出かけ東京へは汽車でかけ、新橋からは鉄道馬車というものに乗っている。

すべてこれ文明開化の世界である。＞（松島雄一郎）

◇ 伊藤痴遊　（政治講談師）（弁天通り）

本名　仁太郎。慶応３年２月弁天通り４丁目に生れた。

はじめ自由党の壮士として活躍し、明治２０年政治講談と称し明治維新の偉人伝、明治政界裏面史、自由党史などを得意とした。

後に衆議員議員、東京市会議員ともなる。

話術の旨さは空前といわれ、晩年、病気で出演できないとき、寝ていて楽屋からマイクで観客にきかせたといわれる位で、近代の名人芸に数えられている。昭和１３年９月２５日没。７１才。

◇ 今 井 卯 木　（川柳家）（弁天通り）

本名　幸吉。明治６年群馬県に生れる。横浜商業学校（現Ｙ校）卒業後、原合名会社に勤めたが文学の道が忘れられず同社のフランス支店から無断で帰国したエピソードがある。川柳の興隆につとめ、埋もれた古川柳の発掘に貢献した。

卯木の号は川柳の柳という字を分けたものである。昭和３年２月３日没。５６才。

◇ 海港文学の会　（弁天通り）

昭和８年、北林透馬、牧野イサオ等によって結成され、その後昭和１５年笹沢美明、山田芳夫、篠原あや等の横浜の詩人たちが加盟、横浜貿易新報の学芸欄に作品を発表、太平洋戦争まで続き横浜文化の向上のために貢献した。

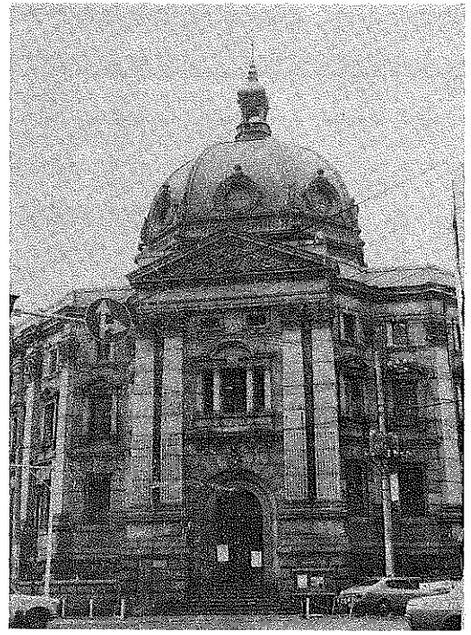
名付親は長谷川伸。事務所の所在は弁天通り４丁目か南仲通り４丁目か現在さだかではない。

◇ 横浜正金銀行と鳥水・幸吉

（南仲通り）

建物の表玄関入口左側に碑が立っている。

＜国指定重要文化財　旧横浜正金銀行本店本館－この建物は妻木頼黄博士の設計による純ドイツ、ルネッサンス様式の建造物で横浜正金銀行本店として明治３２年から明治３７年にかけて建設された。明治時代の貴重な建造物として昭和４４年３月国の重要文化財に指定された。関東大震災で屋上ドームを焼失したが建物本体は災害を免れ、また昭和２０年の横浜大空襲にも損傷されることなく現在に至ったもので昭和４１年３月神奈川県が東京銀行からこれを譲り受けるとともに屋上ドームを復原し県立博物館として長く保存しようとするものである。＞と刻まれている。



旧横浜正金銀行（現 神奈川県立博物館）

小 島 烏 水　（山岳文学家）

本名　久太。明治２５年横浜商業学校（Ｙ校）卒業。

Ｙ校時代（明治２３年）文学雑誌「学燈」を同窓の原田久太郎（棲雲）、今井幸吉（卯木）らと発刊している。

明治２９年に横浜正金銀行に勤務し昭和５年退職するまで在職３４年そのかたわら登山をはじめ、日本山岳会初代会長。また紀行文家として一家をなした。

明治４４年１０月発刊〝文章世界〟の文芸家人気投票番付によれば

戯曲　島村抱月　小説　島崎藤村

評論　坪内逍遙　時文　徳富蘇峰

詩　山路愛山　短歌　与謝野昌子

〃　北原白秋　翻訳　森　鷗外

俳句　内藤鳴雪

と並んで紀行文家として小島烏水の名が見られる。

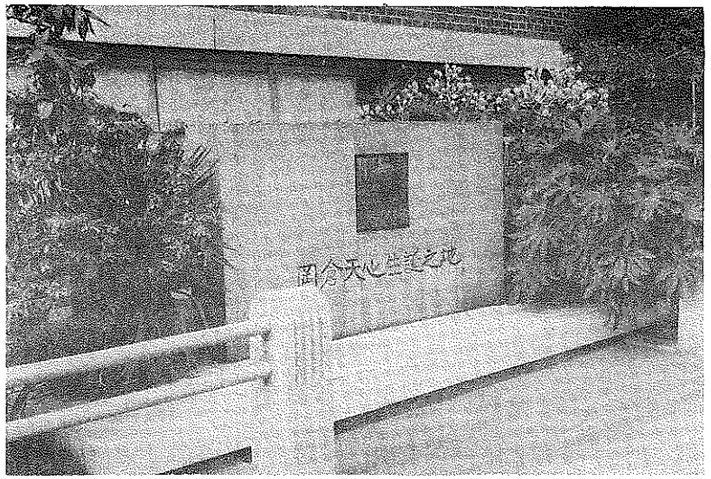
昭和２３年１２月２３日東京にて没。７４才。明治４１年４月上京した石川啄木と弁天通りの旅館長野屋で逢った故実がある。

飯 岡 幸 吉　（歌人）

大正８年横浜商業学校（Ｙ校）卒業、横浜正金銀行に入る。昭和３年５月〝アララギ〟に入会し斉藤茂吉に師事し横浜アララギ歌会を創設した。昭和２８年俳誌〝久木〟を創刊。

昭和３６年横浜文芸懇話会会長。４２年横浜文化賞受賞。昭和４８年７月１７日没。７５才。

◪ 岡倉天心
(東京美術学校校長)
（本町）



岡倉天心の誕生の地（現 横浜開港記念会館構内）

岡倉覚三。文久２年１２月２６日本町１丁目横浜開港記念会館附近で生れた。

明治４年一家と共に東京へ移るまで横浜で育っている。

明治２３年２９才で東京美術学校長、のち日本美術院を創立、さらにボストン博物館東洋部長となり東洋の美術、思想の啓蒙など日本の正しい姿を世界に紹介した。

実に日本美術文化の向上に一生を賭した稀代の偉材であり先覚者であった。〝アジヤは一つなり〟のことばは有名。

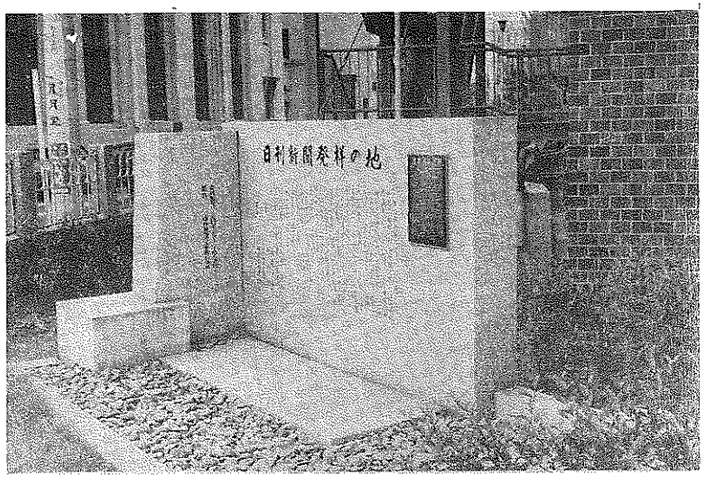
原富太郎（三溪）とも親交を結び三溪の美術開眼は天心によるものだといわれている。

三溪はこの影響によって下村観山、安田靫彦、菱田春草、今村柴紅、前田青邨、小林古径、速水御舟、小茂田青樹、牛田鶏村など数多くの日本画家を後援した。また三溪園グループと称して美術を研究し合ったなかに、滝精一、中川忠順、和辻哲郎、矢代幸雄などがいた。

◪ 横浜毎日新聞　（北仲通り）

明治３年１２月８日、活版、西洋紙を使った一枚刷りのわが国最初の日刊新聞として誕生した。その計画者としては時の神奈川県令井関盛艮が対外関係や国内事情の報道機関として、近代新聞の必要性を痛感し日本人だけの力で発行しようとして、横浜の有

力者　原善三郎、茂木惣兵衛、吉田幸兵衛、増田嘉兵衛などに新聞企業の重要性を説いて出資を呼びかけて創刊されたものである。明治６年には記者として仮名垣魯文や栗本鋤雲、島田三郎などが入社している。



日刊新聞発祥の記念碑（現 横浜生糸検査所構内）

その後綜合新聞へと発展し明治１２年本社は東京へ移りあとは横浜支局として昭和１６年まで続いた。

現在、中区北仲通り５丁目５７番地の横浜生糸検査所の構内に（日刊新聞発祥の地）と刻まれた記念碑がある。

◪ 仮名垣魯文　（戯作者）（北仲通り）

本名　野崎文蔵。文政１２年１月１６日江戸に生れた。明治４年ペンネームを本名に改めた。明治になって開化物を書き＜牛店雑談安愚楽鍋（あぐら）＞は彼の傑作とされている。

明治７年神奈川県に就職して横浜に移り、翌年横浜毎日新聞社の記者となり、のち仮名読新聞社を創設、明治１０年には東京へ移り、やがて近代文学が興るとともに活動を終り明治２７年１０月８日没。６５才。

江戸の最後の戯作者であった。

◇ 岸田吟香　（新聞記者）（海岸通り）

天保４年４月８日、岡山県に生れた。

大阪や江戸に学んだあと元治元年横浜に来てヘボンの治療を受けたのが縁で＜和英語林集成＞の編さんを手伝い〝海外新聞〟〝横浜新報もしほ早〟の刊行に携わった。明治６年〝東京日日新聞〟に入社し台湾に渡って日本初の従軍記者となった。その後東亜同文書院の設立に参画、明治３８年６月７日没。７２才。

画壇の雄、岸田劉生の父。

＜新聞体の文章は福地源一郎（桜痴）と岸田吟香の苦心から起って福沢諭吉によって大成したものといってよかろう＞と伊藤痴遊は云っている。

◇ 有島三兄弟　（海岸通り）

有島武郎　（作家）

明治１１年３月４日東京に生れる。のち父が横浜税関長（その頃の横浜税関は日本全国の税関業務を主管していたので大物の税関長が赴任している）となったので月岡町（現西区老松町）の税関官舎に移り幼年時代を横浜で過した。

童話＜一房の葡萄＞代表作＜或る女＞にも横浜が舞台として登場する。大正１２年６月９日没。４４才。

有島生馬　（洋画家）

明治１５年１１月２６日、月岡町９番地の税関官舎に生れる。藤島武二の門に入り洋画を学び大正２年二科会を創立、洋画界の重鎮となった。雑誌〝白樺〟の創刊にも同人として参加、滞欧生活に題材をとった小説などを発表、大正８年の代表作＜嘘の果＞は横浜が主要舞台となっている。昭和１２年芸術院会員。昭和４９年９月１５日没。９１才

里見　弴　（作家）

明治２１年横浜に生れる。武郎、生馬兄弟の末弟。最初、白樺派に所属し、のち、離れて独自の文学的境地を開いた。

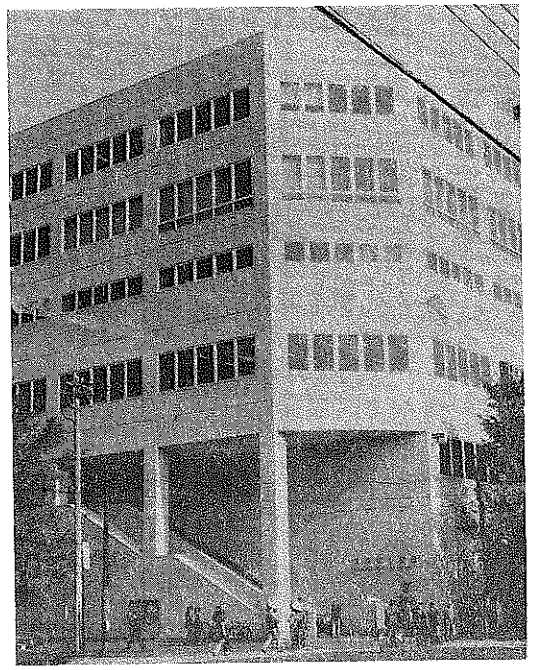
代表作＜多情仏心＞にも横浜の描写がある。昭和３４年文化勲章受賞。鎌倉に住み健在。

◇ 横浜港郵便局と詩人たち　（日本大通り）

現在の郵便制度は明治４年３月１日から行なわれた。それまでは民間の飛脚が郵便の仕事をしていたが、以後飛脚便は禁止された。

横浜に領事館をおいた米、英、仏の三国は夫夫の領事館内に自分たちの郵便局を設け自分たちの国の郵便切手を使って通信していた。

だが日本人に対しては郵便物を配達する方法がなかったため、折角外国から日本人宛に送られてきた手紙はそのまま返送されていた。



現在の横浜港郵便局　最近建て替えられた。

この状態をみて、駅逓頭前島密は雇入れた米人ブライアンを米国にやり、明治６年８月６日郵便交換条約の締結に成功し明治８年１月１日より実施することにきめた。

その結果、領事館内にあった米国郵便局は廃止され日本側で郵便事業を専掌することになった。明治８年１月本町１丁目（現日本大通り５番地）横浜郵便局が落成し、同月５日より神戸局、長崎局と共に外国郵便業務を開始した。明治１０年６月２０日、万国郵便連合に加盟したので英．仏郵便局が廃止され、それ以後、外国郵便局は完全

にわが国の手で取り扱うようになった。

柳　沢　　健　（詩人）

明治２２年福島県若松市に生れる。

結社〝海港〟に名を連らねて頃は横浜郵便局の外国課長の職にあった。当時数え年２９才であるが、すでに三木露風を中心とする象徴派の詩人としてはなばなしい活躍をしていた。

のちに朝日新聞社や外務省に転じて後年は海外諸国との文化交流などにつとめた。

詩集＜海港＞は大正７年の出版だが、そのなかの＜和蘭船＞には往時のヨコハマの港が偲ばれる作品である。

昭和２８年郷里若松で没した。６４才。

詩集＜果樹園＞は名高い。

前　田　春　声　（詩人）　本名　鉄之助。

明治２９年４月１日、東京に生れる。

三木露風や川路柳紅の影響を受けて詩作。大正６年、当時横浜郵便局にいた柳沢健の推挙で同局勤務、一時柳沢の官舎に身を置いた。

そこで横浜の詩人北村初雄や熊田精華を知り詩誌〝詩王〟を創刊する。その頃、詩王は日本においては高度な詩誌であった。

＜柳沢も春声も共に露風の門下だかその作風は前者は白秋に似、春声の方が露風の流れを汲んでいると思う＞と近藤東（詩人）は云っている。

昭和３６年以来、県下真鶴町に住んでいる。

◇　秋　元　不死男　（俳人）（大桟橋）

本名　不二雄。明治３４年１１月３日中区元町に生れた。嶋田青峰に師事し昭和７年〝土上〟の同人となり東京三の筆名で新興俳句運動に加わった。

昭和１６年俳句事件に連座して２年余を獄中で過したが戦後解放され作句の自由

を得た。

横浜文化賞受賞。現在俳誌〝氷海〟を主宰。

大桟橋のターミナルビルの奥まった休憩室の左側に銅板に同氏の句がはめこんである。

「北欧の　船腹垂るる　冬鷗」

多分ノルウエー船をよんだものらしいが、冬の桟橋の風景が実によくでている。

◇　ゲ　ー　テ　ー　座　（山下町）

わが国初期の新劇運動に与えた影響が高く評価されているゲーテー座は明治３年１２月６日居留地６８番（現山下町６８番地）で開場した。

オランダ人ノールトフーク・ヘクトが建坪１２５坪石造の建物を私財をもって建設した。しかし、間もなく劇場としてばかりではなく公会堂としても使われるようになり、手狭のため明治１８年山手町（２５６番～２５７番）に移築された。レンガ造り２７０坪の広壮な建物であったという。

これは大正１２年の震災まで存続した。

北村透谷、坪内逍遙、佐々木信綱、和辻哲郎らが観劇したゲーテー座は山手に新築された方である。

「ゲーテーの前の広場の宵やみに　サロメ聞くを待ちつつ一人」信綱は歌に残している。

◇　ヘ　ボ　ン　（米宣教医師）（山下町）

１８１５年３月１３日米国ペンシルバニア州ミルトンで生れた。

安政６年１０月１８日横浜に来た。文久２年１２月２９日居留地３９番（現谷戸橋畔）に住居を新築した。宣教医として日本人の治療に当るかたわら日本語を学び、ヘボン式ローマ字の創始、和英辞典の編纂や聖書和訳に力をそそぎ夫妻で日本人学生の

教育にも尽力した。

<和英語林集成>の第三版を明治１９年丸善に渡して2,０００ドル（当時約１万円）を得たが、この金を全て明治学院の建設費に献金した。

この<和英語林集成>はヘボン式ローマ字をつかっている。また明治学院が出来るとヘボンは初代総理となっている。

のち、７７才になったヘボンは明治２５年１月尾上町６丁目に指路教会を建設した。

在日、いな横浜にあること３３年間、〝ふるさとなき旅人〟とまで自認し、日本を愛し、日本文化に貢献したヘボン博士は聖書辞典の刊行を終えて、明治２５年１０月１５日指路教会の送別会で５００名に近い信者を前に流暢であった日本語もたどたどしく日本語と英語で最後の別れの言葉を述べた。　そとには秋雨が冷たく降っていた。

「語林集成」初版のものではない。平文（ヘボン）先生著

明治２５年１０月２２日、帰国の途についた。明治４４年９月２１日ニュージャー州イーストオレンジ市で没。９６才。

◪ 大　仏　次　郎　（作家）

本名　野尻清彦。明治３０年１０月１９日中区英町で生れる。のち東京へ移り、府立一中、一高、東大卒業後外務省条約局に勤務したが間もなく文筆活動に専念した。横浜を愛し、酒を愛し、ホテル・ニューグランドを愛した。ホテルが昭和２年開業当時より関連し昭和６年頃よりここを仕事場として<赤穂浪士><霧笛>などを執筆した。

大仏次郎はレパートリーの広い作家だ。

<鞍馬天狗>などの大衆小説を書き続けながら一方では戦後、芸術院賞となった<帰郷>やパリ・コミューンに材をとった長編<パリ燃ゆ>などの力作を発表、この間に<若き日の信長>といった戯曲も書くというその作風の幅の広さには驚かされるが、それらの作品の支えとなっているのは氏の西欧的な教養である。そしてその作品の何割かはニューグランドの３階３２０番室で創作された。

その后<天皇の世紀>のようなノンフィクションの史伝をライフワークとして世に問うていた。昭和３９年文化勲章受章。

昭和４８年４月３０日没。７５才。

ＴＶＫでは<鞍馬天狗逝く>という番組を特集しその計を惜んだ。

大仏次郎は<霧笛>のあとがきで言っている。

<昭和８年朝日新聞に書いた〝霧笛〟は私が明治期を扱ったものの中で最初のものである。大震災でも焼け残った明治代の古い建物など、まだ残っていた頃だったので、その見聞からこれを組立てた。私は横浜生れだし、明治の古い横浜の郷愁のようなものを感じて成長した。震災の後の戦災でも、もとの面影が跡かたもなく消えて了って見ると〝霧笛〟を書いて置いてよかったと思っている。>

最後に、氏の作品のなかに昭和１６年<その人>というのがある。

旗本の御曹子で鳥羽伏見の戦い、上野戦争、果ては奥州まで走ったが、ことごとく敗れて横浜にやってきて人足になって働いている若者の話である。その昔を知っている者が「世が世ならば」と同情の言葉をいう。若者は毅然として「いや、これでよいのだ。何もできないくせに武士（さむらい）だからといって威張っていた昔があやまっていた。私はここへ来てはじめてほんものの人間の生活を知った。これが正しいだ。」という意味の答えをする。

開港時の横浜の姿を実によくとらえている作品だ。古い日本人から新らしい日本人への脱皮をうながす力がハマにあった。

民主々義とか市民社会というものが、そこに現実として働いていたのである。

この旗本の若者と同じ自覚をもった人々が横浜を作り、近代日本を作って来たのだろう。

ともあれ、横浜がこれからどう変貌しようとも他都市に味えない開港以来の底抜けに明るい開放的な進取の市民性だけは失いたくはないものである。

中区社会教育主事　原　田　一　郎

資料　中区文学散歩

昭和49年11月29日　印刷・発行

■ 編集・発行　中区役所市民課

■ 印刷　大洋印刷工業株式会社